

学校体育の指導課程において抱かれる教師の「創作ダンス」観念(Ⅲ)

—「女子体育」誌における模倣・表現運動から—

佐々木 昌 代

1. ねらい及び方法

社団法人日本女子体育連盟発行「女子体育」より、実践報告「小学校の表現運動(低学年)(中学年)(高学年)」(平成3年4月号～平成6年3月号)、同「内容と指導」(平成6年4月号～平成8年3月号)を取り上げ、具体的な指導案を除く文章部分を意味微分・類別し、以下の(1)～(4)について、小学校体育の低学年・中学年・高学年の指導過程において抱かれる教師の創作ダンス観念を相対的に探求する。

- (1) 指導者の創作ダンスに対する意識・考えについて
- (2) 指導者の考える学習者の創作ダンスに対する意識・実態について
- (3) 指導者が意図する学習のねらいについて
- (4) 指導者の授業実践後の課題意識について

2. 結果

- (1) 指導者の意識・考え
 - ・「新しい学力観そのものの実践」「学級経営の全てがみえてくる」「みるみる子どもが変容する」領域で、教師としての姿勢や力量が問われる。特に、高学年でこの意識が強い。
 - ・学習者一人ひとりが「生き生き」と「自分自身を表現する力」を伸ばせるところに取り組みの大きな意味がある。
 - ・低学年では、体育の時間に限らず学校生活ひいては生活全般が表現学習の場である。
 - ・学習者の経験不足や羞恥心が指導を困難にしていることがある。この意識は高学年で僅かにあるのみ。
- (2) 学習者の意識・実態
 - ・低学年では、抵抗なく喜んで動くが「見合う」「友達と」「全身で意識して」は難しい。
 - ・中学年では、「楽しく取り組む」と「恥ずかしさが先に立って」「躊躇する」が相半ばしている。
 - ・中学年では、「友達との関わり」が上手になってくる。
 - ・高学年では、経験不足と「恥ずかしさ」から楽しく取り組むことが難しくなるが、グループ学習の状況が整えば自分達で学習を進められる。
 - ・低学年での「なりきる体験」が中学年、高学

年の表現にうまく繋げていくために大切である。

(3) 学習のねらい

- ・低学年では、授業成果から学習者の生活そのものを活気づけることをねらっている。
- ・高学年では、授業成果から学級の人間関係をも充実させることをねらっている。
- ・低学年では、「かまえずに」「いつのまにか」「単発に」「次々と」模倣し、生活全般の中で生活体験に根ざした表現学習をめざしている。
- ・中学年では、模倣から表現への移行を意識し、多様な題材で多様な動きを体験しつつ、学習者の心の動きに向き合う表現への取り組みもめざしている。
- ・高学年では、「グループと個」「男女差」を積極的に生かして、学習者が互いに認め合い高め合うことをめざしつつ、より内面から湧き出る表現運動を求めている。

(4) 指導者の課題意識

- ・最も工夫すべき課題は「言葉かけ」である。そのために指導者は学習者との信頼関係を築き、指導者自身が物事を柔軟に多角的にとらえられるようであればならない。比較的、中学年でこの意識が強い。
- ・次いで、「どのような題材を取り上げるか」に最も腐心し、学習者の現在の「思い」から教材づくりをはじめめる。
- ・低学年では、「言葉かけ」によって学習者と動きのやり取りを進めながら、「単調にならず」表現のおもしろさを味わわせ、「認め」「励まし」ていくことが大切である。
- ・高学年では、指導性の高さが学習者の興味関心と噛み合わないことを見直し、学習者一人ひとりに「どのように学習の見通しを持たせるか」が生き生きとした意欲的な活動を確保する。加えて、グループ活動となってからの指導の工夫が課題である。
- ・学習者が互いに学び合えるように、「みる」活動を生かしつつ、自己評価の観点を明確にしたり、学習カード等の記録をより工夫したりする必要がある。

3. まとめ

「自己教育力」を育てようと「新しい学力観」が提唱されるなかで、創作ダンスは最もその追求に相応しい領域であるとみなされ、「ダンスは難しい」という観念はすでに授業実践の喜びや授業研究の糧と変わっているようである。